

## 第3章

全体的考察:「養成」と「研修」を一体化させる

「重層的な学び」



# 全体的考察： 「養成」と「研修」を一体化させる「重層的な学び」

大泉 義一

## 1 本事業で仮定した「重層的な学び」

本事業においては、「養成」と「研修」双方の役割を果たす、すなわち教員養成と現職研修とが一体的な取組みとなる「学校インターンシップ」科目の構築を目指した。そこで本事業の申請においては、第1章で述べたように、「学校インターンシップ」に参画する人材に関して以下のような「重層的な関係」が必要であると仮定された<sup>1)</sup>。

「本学部が構築し展開する学校インターンシップでは、学生に対して、大学での学修を踏まえつつ学校インターンシップに従事させる中で、評価指標に沿った教師力の育成を目指すことに加え、授業を実践する教員やインターンシップの場を参観する同僚の教員（他校の教員を含む）に対しても、公開される授業を通して学ぶことができる機会を提供することをねらっている点にその特徴がある（図1（再掲）を参照）。これは、この活動にスーパーバイザーや大学教員など「授業を意味づける第三者」が加わることによって実現される学びである。すなわち、授業を対象としてスーパーバイザーを介して学ぶ学生や参観している教員という個別の学び

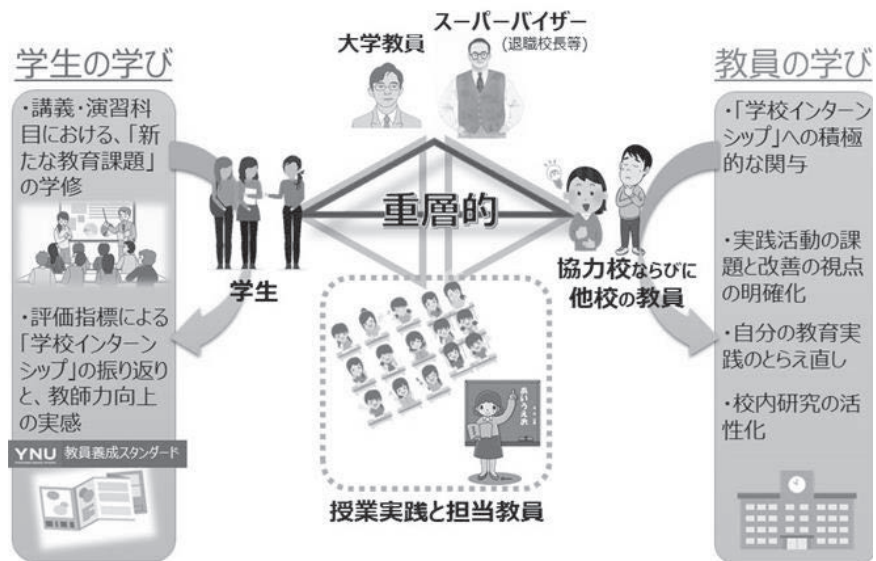


図1（再掲） 「学校インターンシップ」における学生と教員の学びの特性

に加え、授業後における「学生⇄スーパーバイザー⇄授業担当教員（参観した他校の教員）」の三者間での意見交換や協議によって深められる立場を超えた学び（＝重層的な学び）が期待できる点にその特徴がある。」

前章で報告した「学校インターンシップ」の実践においては、共通して「教員になろうとする学生」に対して行われる「教員養成」の側面と「小中学校の教員」に対する「現職研修（OJT）」としての意味の双立のために、「授業（実践）を意味づける第三者」としての「スーパーバイザー・大学教員」の役割が必然的に要請されている。そしてその役割機能の基に教員養成と現職研修が一体となった「重層的な学び」が位置付いている。この「学生 - 小中学校教員 - スーパーバイザー・大学教員」の三者関係の構築は、中央教育審議会教員養成部会答申において指摘されている「養成段階から研修段階までの資質能力の向上施策を、教育委員会、大学等の関係者が一体となって体系的に取り組むための体制の構築」<sup>2)</sup>に該当するものであると考えられる。

それでは、この「重層的な学び」を成り立たせるための三者関係とは、本調査研究においてはどのように具現化されていたのであろうか。以下、「学校インターンシップ」の実践による調査研究から見出された、その関係構築のためのいくつかの要件について考察する。

## 2 「重層的な学び」の実現に必要な要件とは

### (1) 創発（Emergence）的に協働する組織

「重層的な学び」を成立させるためにまず考えなければならないことは、「学校インターンシップ」に参画している「学生」、「小中学校教員」、「スーパーバイザー・大学教員」による三者関係が、創発（Emergence）的に関わり合うように組織化されていることである。安斎（2011）らは「複数人のアイデアの連鎖によって新たなアイデアの創発が導かれるコラボレーションのプロセス」を「創発的コラボレーション」と呼び、その創発の源泉には「矛盾」があるとした<sup>3)</sup>。一つの課題に向かい合う他者同士が、各々の考え方を提示し、そこに矛盾が生じることで新たな解決策が生まれるとしているのである。つまり創発の前提には、協働的な関係が構築されていることが必要である。荒木（2012）によれば、協働概念を構成する要素には、次の5つがある<sup>4)</sup>。

- ・ 目標の共有化 … 各主体が共有できる目標の設定
- ・ 主体間の並立・対等性の確保 … 各主体は互いに自主・自律性を確保し、支配されない
- ・ 補完性の確保 … 目標が効果的に達成されるように各主体は能力や資源を互いに補完する
- ・ 責任の共有 … 各主体は成果に対する責任を有する

・ 求同存異の原則確立 … 各主体の異なる点を互いが尊重していく

これらの要素を、本研究の三者関係に当てはめてみるならば、次のようになる。「学生」、「小中学校教員」はそれぞれの課題（養成、研修）を携えながらも、一つの授業を「つくる」営みに参画することで共通の目標を目指すことになる（目標の共有化）。そして、その営みにおいて「学生」、「小中学校教員」は、対等の立場で関わり合い、また互いの意見や考えを出し合うことが、「スーパーバイザー・大学教員」による学習環境デザインによって促されている（主体間の並立、対等性の確保、補完性の確保）。つくられた授業は、児童生徒に対する公教育の機会として提供される（責任の共有）。そして実施された授業に対する評価は、それぞれの課題に沿って行われ、生かされることになる（求同存異の原則確立）。

現状の「養成」と「研修」においては、上掲したような関係性を構築し難い状況にある。例えば、教育実習の場面を考えてみればわかるように、「小中学校教員」と「学生」の間には、「教え - 教えられ」の関係が存在しているし、「大学教員」と「学生」の間ではもちろん、「大学教員」と「小中学校教員」の間においても同様である（このことは、大学教員を講師に招いた小中学校における多くの研修会が講習的な位置付けであること - もちろん、こうした関係を否定するわけではないが - からも確認することができる）。対して本調査研究では、例えば石田の「ICT を活用した教育実践コミュニティへの参加に向けた『つながりの学習』のデザイン」においては、「つながる学習」における学習環境デザインの原理として、「ネットワークが開かれていること」を掲げ、〈小中学校教員、学生、大学教員、企業〉間の協働的關係において「重層的な学び」の実現を果たしている。また和田の「ICT の利活用による児童の思考・表現活動を活性化させる理科授業の開発 - 大学・小学校・企業の連携による協創的活動 -」においては、エンゲストロームの「ノットワーキング（knotworking）」の活動理論を援用しながら小学校、大学、企業の協働活動システムを構築することで「重層的な学び」を具現化している。

このように、本調査研究の「学校インターンシップ」に参画する「学生」、「小中学校教員」、「スーパーバイザー・大学教員」の三者関係には、創発的に協働する組織が構築されており、そこに「重層的な学び」が生起しているのである。

#### (2) 「スーパーバイザー・大学教員」による「インストラクションとファシリテーション」

上述した「創発的に協働する組織」における三者関係をさらに詳細に見るならば、その関係の形成原理を明らかにする必要がある。とりわけ前項でも述べた通り、現状では“上意下達”的になりがちな、「学生 - 小中学校教員」、「学生 - スーパーバイザー・大学教員」、そして「小中学校教員 - スーパーバイザー・大学教員」の関係を、協働的關係に編み直

していくためにはどのような方策が有効であったのかを探る必要がある。

本調査研究を通して浮かび上がってきたのは、「スーパーバイザー・大学教員」が果たす役割の重要性である。そこでは、「学生」，「小中学校教員」に対する関わりとして、「インストラクション」と「ファシリテーション」とが相互に使い分けられていた。例えば，泉の「大学と地域の小学校の連携による教員養成の在り方の検討 -特別支援教育の充実とインクルーシブ教育の実現に焦点をあてて-」では、「スーパーバイザー・大学教員」は，特別支援教育に関スル一定の知見に基づきながら，「学生」，「小中学校教員」に助言し，共有した目標に向けて適切な方向性へと導くよう「インストラクション (Instruction)」を中心とした関わりを行う必要があった。一方で，梅澤の「学校インターンシップ」の実践を通じた調査研究「アクティブ・ラーニングへのパラダイムチェンジ -小学校体育における協働的な授業づくり-」では，アクティブ・ラーニングの授業づくりの過程に学生が参加することに高い価値が見出されている。それは「学生」や「現場教員」が自身の考えやアイデアを互いに出し合うことができるような組織となるよう，“授業づくり”のあり方そのものをマネジメントする「大学教員」の関わりがあったからである。そうした関わりとは「ファシリテーション (Facilitation)」であると考えられる。高橋 (2009) は，ワークショップにおいて「ファシリテーション」を行う者 (ワークショップの企画・運営にあたる者) を「ファシリテータ Facilitator」として，「Facilitate (動) 容易にする，促進する」，「Facile (形) 容易な」，「Facility (名) 施設，便宜」という言葉の意味から，「促進者」と規定している<sup>5)</sup>。つまり，ワークショップ参加者の活動を促進する者という位置付けである。本調査研究における三者関係においては，「学生」と「現場教員」が互いの主体性を高めながら「養成 (学修)」，「研修」に取り組めるよう，「スーパーバイザー・大学教員」がファシリテータとして関わることの有効性が見られた。ちなみに小串 (2009) は，子供向け芸術ワークショップにおけるファシリテータに求められる資質・能力として「子供に対する理解」，「芸術行為の理解」，「包容力，総合的な力」を挙げている<sup>6)</sup>。つまり，ファシリテータには，「専門分野に関する能力」と「人間や教育についての総合的な能力」の双方が必要であるということであり，このことは，「重層的な学び」を実現するための創発的に協働する組織の形成のために「スーパーバイザー・大学教員」に求められる資質・能力の一端を提示していると言える。

ところで，「スーパーバイザー・Supervisor」とは，一般的には次のように定義される<sup>7)</sup>。

- ① 管理者。監督者。
- ② システムの動作を監視するソフトウェア。一般にオペレーティング-システムをいう。
- ③ 福祉事務所において，カウンセラーやソーシャル-ワーカーなどの現業員の指導・監督を行う者。査察指導員。

本学では、これまでも「初等・中等教育フィールドワーク研究」において、退職校長を「スーパーバイザー」として任用してきた。そこでの位置付け、役割は次の通りである<sup>8)</sup>。

- ・「主に退職した小学校校長を大学が委嘱して、実習中のS T (学生教師／Student Teacher) にアドバイスや指導を行う大学のスタッフ」
- ・「指導者の役割」<sup>9)</sup> (註：この「指導者」とは「スーパーバイザー」のことである)

#### ① S T に対する指導

S T の学校生活 (拠点校) の指導

授業力向上のための指導 (授業観察, 授業実習)

S T の「課題設定」のアドバイス

課題レポートの指導

S T へのカウンセリング

担任教師・大学教員と共に S T の達成状況を把握

#### ② 拠点小学校との連絡調整

学校側との連絡調整

#### ③ 大学との関わり

大学での実習活動振り返りの授業に参加し, S T への指導助言

大学への S T の成績資料の作成

ここでの「スーパーバイザー」は、教育現場実習 (フィールドワーク) を実施するための連絡調整役としての役割をも含んだ包括的な指導者として位置付いていることがわかる。本調査研究においては、「大学教員」、「退職校長」、「企業 (の人材)」がこれに該当するが、先述したような「インストラクション」、「ファシリテーション」による関わりを加味するならば、「学校インターンシップ」における「スーパーバイザー」とは、次のような定義になるのではないかと考えられる。

「取り組む教育課題に対して、一定の専門的知見 (学校教育に限定せず、子供を育てるうえで知見) から、授業を意味づける第三者として、学生並びに現場教員に対して指導的助言や学びのファシリテーションを行う者」

この「指導的助言や学びのファシリテーション」には、「専門的知見」を教授する単なる方法論としての意味合いのみならず、先述したファシリテータに必要な資質・能力のうち、「人間や教育についての総合的能力」が要請されている。翻ってみれば、高木 (2016) が

現行の学習指導要領の各教科の学習が、どちらかというところ「コンテンツ・ベースの学力」であるとし、今後求められる学習のあり方として、知っていること、できることをどう使うかという、思考力・判断力・表現力を重視した「コンピテンシー・ベースの学力」に目を向けていかなければならないと指摘していることが想起される<sup>10)</sup>。「スーパーバイザー・大学教員」には、「インストラクション」によって「専門的知見」を提示すると同時に、そこで得た知識・技能を基に、「学生」そして「現場教員」が学び、研鑽できるように「ファシリテーション」を実践していくことが求められるのである。

#### (3) 「授業を意味づける第三者」としての「スーパーバイザー・大学教員」

本調査研究においては、「スーパーバイザー・大学教員」を「授業を意味づける第三者」と位置付けている。この「授業」とは「学校インターンシップ」において「小中学校教員」が実践・提供する「授業」のことであり、上述した三者関係において共有する目標でもある。当然ながら、実践する「小中学校教員」にとって「授業」とは、自らの教育信念に基づいた、ある意味主観的な捉えを前提にしているものである。一方で「学生」にとってそれは、意味、解釈を獲得しようとする、未だはっきりとした輪郭のつかみ切れていない学習対象である。そうした別箇な対象である「授業」を共有し、その意味を協働的に考察し合うためには、一定の専門的知見から意味づけを行う者が必要である。本調査研究においては、その役割を「スーパーバイザー・大学教員」が担うことになった。

「授業を意味づける第三者」としての「大学教員」には、対象となる授業の教科的側面に関する専門的知見や包含されている現代的な教育課題に対する専門的知見が求められる。前章の「学校インターンシップ」実践による調査研究に関わる「大学教員」は、自らの専門的知見を、前項の言うところの「インストラクション (Instruction)」を通して「学生」、「小中学校教員」と共有していた。例えば、藤井の「学校インターンシップ」実践を通じた調査研究『特別の教科 道徳』に向けた話し合い活動を中心とする授業の方法と課題』においては、小学校では平成30年度より、中学校では平成31年度より全面実施される「特別な教科 道徳」の学習指導要領の目標と内容に関して共通理解を図るための関わりを行っていた。このような場面において「大学教員」は、「授業を意味づける第三者」として、一定の専門的知見から指導的助言を行う者としての役割を有していたのである。

同時に、この役割は「大学教員」に限らないものであることも明らかになっている。石田による「学校インターンシップ」実践による調査研究「ICTを活用した教育実践コミュニティへの参加に向けた『つながりの学習』のデザイン」、そして和田による「ICTの利活用による児童の思考・表現活動を活性化させる理科授業の開発 -大学・小学校・企業の連携による協創的活動-」においては、「大学教員」の他に、DeNAという企業人材が「スーパーバイザー」として参画している。ここでは、とりわけ現代的な教育課題（この例の場合



は「ICTの教育活用」)に対する「一定の専門的知見から、指導的助言を行う者」として役割を全うしていたことになるだろう。実はこのことは、次期学習指導要領において重視されている根本理念の一つである「社会に開かれた教育課程」の実現と大きく重なっている<sup>11)</sup>。これからの学校教育においては、子どもたちが変化の激しい社会を生きるために必要な資質・能力の育成に向け、社会との連携・協働を重視しながら学校の特色づくりを図っていくこと、現実の社会との関わりの中で豊かな学びを実現していくこと、そしてそのためには、学校教育の中核となる教育課程全体を通して、各教科等における学習と社会とのつながりについて、あらためて考える必要があるとされているのである。そうした状況の中で、企業が唯一つの「授業」を学校関係者と共有していた取り組みは、まさしく「社会に開かれた教育課程」の実現のための第一歩であると考えられるのではなかろうか。

#### (4) 「重層的な学び」における「つくりながら知る」

奈須(2001)は、「教育という領域のもつ最大の特質は、“つくる”ということではないかと思う。教師は日々授業をつくり、教育課程をつくり、学校をつくっている。」と述べ、教育において「つくる」ということが根底的な命題たり得ることを示唆している<sup>12)</sup>。つまり、教育において永く議論の俎上に上っている「実践と理論の乖離」を克服するためにも、「現場教員」が当たり前のように日々行っている「つくる」営みに対して、「スーパーバイザー・大学教員」が参画していく機会を有意義に活用する必要がある。さらに奈須は、そのための原理として、「つくりながら知る」という研究方法論を提案している。そこでは、「理論と実践の対立図式」を超え、それらの照応関係をなめらかにつなぐ接続する中間概念としての「実践原理」の創出を伴いながら実践がつくられることにより、さらには「つくることを通して理論が豊かになる」ことにつながっていくとされている<sup>13)</sup>。こうした考え方は、デザイン思考を育成するための教育プログラムの実践原理にも一般的に適用されている。例えば、英国の王立芸術大学院大学(Royal College of Art (RCA))におけるデザイン・プロセスは、「作りながら考える」に重点が置かれているという<sup>14)</sup>。決してコンセプト(理論)が先にあるのではなく、チームで実際に行動(つくる)することから、コンセプト(理論)とのかかわりについて吟味・検討していくことで、創発的に出来事が生成される。さらにそこには、成果としてモノのみならず、協働的な組織化がもたらされるのである。

それでは、本調査研究において、学生、現場教員は実際にどのような「つくりながら知る」プロセスを経て学び、研鑽を行ってきたのであろうか。最後にそのことを確認してみたい。

Korthagenら(2001)は、理論と実践を繋ぐことの重要性を指摘し、リアリスティック・アプローチを提案した<sup>15)</sup>。そこでは教師の経験を基盤にして学習が行われるのであるが、

### 第3章 全体的考察：「養成」と「研修」を一体化させる「重層的な学び」

その学習の具体的方法として提案されているのが「ALACTモデル」(図3)である<sup>16)</sup>。ALACTモデルは、経営学に適用されている Kolb (1984) の経験学習理論モデルを教師教育(教育実習生指導)の文脈に置き換えたものである。そのプロセスは次の通りである。まず、経験する段階として「行為」が位置付けられる。次にその行為における経験を振り返る「行為の経験」の段階がある。さらに「本質的な諸相の気付き」として経験を構造化し、分類等が行われる。そして、これまでのプロセスをふまえて具体的にどのように行動すればよいかを志向する段階として「行為の選択肢の拡大」が位置付けられる。最後の「試み」は実際に行動を行う段階であり、これは次の「行為」とリンクしており、循環して学びが進んでいくことになる。

このモデルに、本調査研究における三者関係をトレースしてみるとどうなるであろうか。以下、エピソード的に関連を検討してみたい。

「現場教員」並びに「学生」は、教育課題を共有して「授業・実践をつくる」ことに取り組む。これは「行為」の段階であると考えられる。ここでは「スーパーバイザー・大学教員」の「ファシリテーション」によって、平等な対話を通じた創発的に協働する組織が構成されている必要がある。次につくられた授業・実践を実際に行い、そこでの経験の振り返りが行われ、「行為の経験」の段階がなされる。ここでも「スーパーバイザー・大学教員」はファシリテータの役割を果たすことになる。同時に「スーパーバイザー・大学教員」からの指導・助言(「インストラクション」)によって、それぞれの経験に対する意味付けがなされる。これが「本質的な諸相の気付き」の段階である。そこでの気付きをふまえて授業改善や学習指導の改善が行われ、「行為の選択肢の拡大」がなされる。そして再び実践にフィードバックされることで「養成」と「研修」は進んでゆく。この段階は「試み」そして「行為」の段階に該当すると考えられる。

以上のように、本調査研究における「養成」と「研修」を一体化させた「重層的な学び」は、「学生」、「現場教員」、「スーパーバイザー・大学教員」の三者が「創発的に協働する組織」として機能することで、経験学習的に実現され得ることが明らかになった。さらにトレースしたALACTモデルは一人称、もしくは二人称から構成されるモデルであったが、本調査研究における「重層的

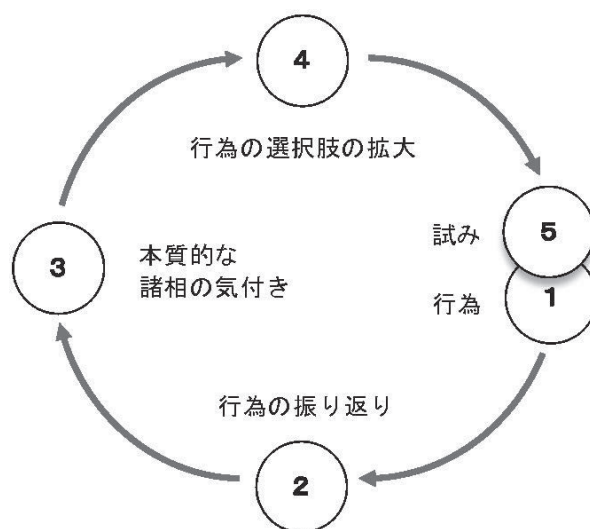


図3 ALACTモデル (Korthagen et al. 2001)

な学び」とは、さらに立体的な創発関係の社会的ネットワークの中に実現されるものであることが予感される。

### 3 見出された課題

以上、本調査事業を通して見出すことのできた「重層的な学び」が成立する要件について考察を行ってきた。本調査事業では、個別具体的な実践を通じた研究が中心であった。それがゆえに今後は、そこから明らかになった事柄をより広範な実践に適用してその有効性を精査していく必要がある。もちろんそれは、本学部がこれから目指していく教員養成のあり方と重ねて検討する必要があるだろう。

また今回の調査研究では、「養成」と「研修」が、成功体験的に行われていくケース・スタディが取り上げられている。むしろ、教育現場においては「うまくいかないケース」とどう向き合うかという「レジリエンス」に対して必要な教師力を見出していくことが重要であるとする考え方もある<sup>17)</sup>。また本学部が所在する横浜市においては、とりわけ小学校教育現場を中心に、今後も「大量退職・大量採用」が続くという予測が持たれている<sup>18)</sup>。そうした中では、横浜市教育委員会が設置を進めている「メンターチーム」が示唆的である。ちなみに横浜市のそれは次のような構成からなっている<sup>19)</sup>。

「メンターとメンティを複数対複数の関係にし、経験のある先輩と経験の浅い後輩の『タテ』の関係と、同期や同じキャリアステージにある1，2年先輩の『ヨコ』の関係を相互に組み合わせている。そしてこのチーム内で、メンター役となる先輩教職員が中心となってメンタリングをすすめている。」

ここでのメンティは、メンターに対して「信頼・自己開示」が必要であり、その心構えとして「全人格的」に関わる姿勢が求められている。つまり、ここでの「研修」の前提には、組織（チーム）内の温かな人間関係が重要な土壌として位置付いているのである。こうした考え方は、教師のレジリエンスのあり方とも通底するものであり、今後は、この「メンターチーム」の考え方を、教員養成にも適用していくことが必要になるのではないかと考えられる。

### 文献

- 1)「平成28年度 総合的な教師力向上のための調査研究事業 事業計画書」(横浜国立大学、平成28年3月18日)より抜粋
- 2) 中央教育審議会 初等中等教育分科会 教員養成部会「これからの学校教育を担う教員

### 第3章 全体的考察：「養成」と「研修」を一体化させる「重層的な学び」

---

- の資質能力の向上について（教員養成部会中間まとめ）」2015年  
[http://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2015/08/06/1360150\\_02\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2015/08/06/1360150_02_1.pdf)（2017年3月9日参照）
- 3) 安齋 勇樹, 森玲奈, 山内祐平「創発的コラボレーションを促すワークショップデザイン」日本教育工学会論文誌 35(2), 2011年
  - 4) 荒木昭次郎『協働型自治行政の理念と実際』敬文堂, 2012年
  - 5) 高橋陽一『美術と福祉とワークショップ』武蔵野美術大学出版, 2009年
  - 6) 高橋, 同上
  - 7) 『大辞林 第三版』
  - 8) 横浜国立大学教育人間科学部「初等教育フィールドワーク研究『実習ノート』（第2次案）」2007年
  - 9) 横浜国立大学教育人間科学部学校教育課程「日常的・継続的教育実習のための指導者用手引書」2007年
  - 10) 横浜国立大学教育人間科学部附属教育デザインセンター「教育デザインセンターをハブとした都市型総合大学における教員養成システムの構築（平成27年度（5年次）報告書）」2016年
  - 11) 中央教育審議会 初等中等教育分科会 教育課程部会「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ」2016年  
[http://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2016/09/09/1377021\\_1\\_1\\_11\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2016/09/09/1377021_1_1_11_1.pdf)（2017年3月9日参照）
  - 12) 奈須正裕「教育心理学と実践活動：つくりながら知る」日本教育心理学会誌『教育心理学年報・第41集』, 2001年
  - 13) 奈須, 同上
  - 14) 国立大学法人九州大学大学院芸術工学研究院『デザイン教育のススメ ～体験・実践型コミュニケーションを学ぶ～』花書院, 2012年
  - 15) Korthagen, F. A. J, Kessels, J., Koster, B., Lagerwerf, B. & Wubbels, T. (2001) *Linking Practice and Theory : The Pedagogy of Realistic Teacher Education*. Routledge.
  - 16) 中原淳『教師の学びを科学する -データから見える若手の育成と熟達のモデル-』北大路書房, 2015年
  - 17) Christopher Day & Qing Gu (2014) *Resilient Teachers, Resilient Schools : Building and Sustaining Quality in Testing Times*. Routledge.
  - 18) 松原雅俊, 柳澤尚利「横浜市立学校の校内人材育成の改善に向けて -メンターチームの成果と課題の分析を通して-」『教育デザイン研究 第8号』, 2017年
  - 19) 松原ら, 同上

## 結語：謝辞にかえて

本事業は、平成 27 年 12 月 21 日の中央教育審議会答申「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～（中教審第 184 号）」の提言を踏まえ、その基盤としての養成・採用・研修の一体的改革に取り組むという国の方針に基づき、「総合的な教師力」の育成・向上に向けた取組として、新たな教育課題に対応した教員の資質・能力の育成を目指すものと位置づけられる。

上記の観点から、本学は、新たな教育課題に対応できる教員の資質・能力の育成を、「学校インターンシップ」科目の改善によって実現することを目指した。特徴としてあげられることは、教員の養成と研修を一体化させる学校インターンシップの取り組みとして工夫・改善することで、高度専門職としての教員の資質・能力の向上を目指した点である。本学が試行した取り組みをさらに実りあるものにしていくためには、養成段階と研修段階のそれぞれの現状を双方が再確認すると共に、今まで以上にそれらを一体的にとらえ運用していけるように、考え方や実施の枠組みを見直していくことが必要であるように思われた。このことは、大学と教育委員会の連携に関する今後の課題として、さらに検討を加えていく必要がある。

本事業で試行されたそれぞれの学校インターンシップについては、個々の取り組みの良さを生かすかたちで本学の教職カリキュラムに組み入れることが、次なる課題として存在している。今後は、平成 30 年度の教育職員免許法の改正を 1 つの契機としながら、教職カリキュラムの改編に精力的に取り組んでいきたい。

最後に、限られた時間の中で本事業を積極的に推進して下さった本学教育人間科学部の石田喜美准教授、泉真由子教授、梅澤秋久准教授、鬼藤明仁准教授、鈴木允講師、島田広准教授、藤井佳世准教授、和田一郎教授、また、本事業全体をリードするとともに成果のとりまとめにご尽力いただいた大泉義一准教授に心より感謝申し上げたい。そして、申請段階から本事業の重要性について理解を示していただき、学校インターンシップの実施にご協力いただいた横浜市教育委員会教職員育成課の松原雅俊課長様はじめ同課の指導主事の皆様に、この場を借りて御礼申し上げる。

加藤 圭司



資料





## 授業実践からの、自身の学びを振り返る

学籍番号： \_\_\_\_\_ 名前： \_\_\_\_\_

**質問 1**

各項目の理解・認識・関心の度合いを自己評価し、4段階で回答してください。

(1) 実践前の時点ではどうだったかと、(2) 実践を終えた現時点ではどうか、のそれぞれについて回答してください。4段階の基準は、以下の通りとします。最もよく当てはまる数字に○をつけてください。

	4	-	3	-	2	-	1
理解・認識が	とても深い		深い		浅い		とても浅い
意欲・関心・意識が	とても高い		高い		低い		とても低い

**【教師に求められる基盤的資質と、教職に関する知識・理解に関する項目】**

	評価項目	(1) 実践前	(2) 実践後
①	教師になりたいという意欲 (□-2)	4 - 3 - 2 - 1	4 - 3 - 2 - 1
②	教師の使命と職務内容、子供に対する責務の理解 (□-3)	4 - 3 - 2 - 1	4 - 3 - 2 - 1
③	自己を積極的に表現し、他者の言葉を共感的に理解する意識 (□-3)	4 - 3 - 2 - 1	4 - 3 - 2 - 1
④	他の先生方と連携・協働して実践を行う意義の理解 (□-4)	4 - 3 - 2 - 1	4 - 3 - 2 - 1
⑤	地域や外部の方々と連携・協働して実践を行う意義の理解 (□-5)	4 - 3 - 2 - 1	4 - 3 - 2 - 1
⑥	自分の学びを振り返り、課題を見つけて改善する意義の理解 (□-6)	4 - 3 - 2 - 1	4 - 3 - 2 - 1
⑦	各学校において教育課程の編成・実施・評価・改善を行うことの大切さの理解 (□-3)	4 - 3 - 2 - 1	4 - 3 - 2 - 1
⑧	教科等の目標、学習内容の系統性、学年間のつながり等についての理解 (□-4)	4 - 3 - 2 - 1	4 - 3 - 2 - 1
⑨	⑧の理解を踏まえた効果的な指導法に対する意識 (□-4)	4 - 3 - 2 - 1	4 - 3 - 2 - 1
⑩	学習評価の役割や方法、指導と評価の一体化の重要性についての理解 (□-5)	4 - 3 - 2 - 1	4 - 3 - 2 - 1
⑪	社会の変化に対応する課題(グローバル化、情報化、E S D等)や教育改革の動向についての関心 (□-6)	4 - 3 - 2 - 1	4 - 3 - 2 - 1
⑫	現代的な諸活動に対する諸機関の取組に対する理解 (□-6)	4 - 3 - 2 - 1	4 - 3 - 2 - 1

◎ 上の項目の中で、自分自身の評価が実践前と後とで変化した項目のうち、自分にとってとりわけ意味のある変化を1つ取り上げ、どのような機会がその変化につながったのか、なるべく具体的に書いてください。

## 【教科等の指導に関する項目】

	評価項目	(1) 実践前	(2) 実践後
①	主体的・協働的に学ぶことが求められていることなど、これからの授業づくりの方向性についての関心 (□-1)	4 - 3 - 2 - 1	4 - 3 - 2 - 1
②	学習指導案を作成する意義や、その具体的な方法についての理解 (□-2)	4 - 3 - 2 - 1	4 - 3 - 2 - 1
③	子供たちの学習状況や興味関心を考慮して学習指導案を作成する意義の理解 (□-2)	4 - 3 - 2 - 1	4 - 3 - 2 - 1
④	学習のねらいに応じた教材作成の重要性の理解 (□-3)	4 - 3 - 2 - 1	4 - 3 - 2 - 1
⑤	目標の実現に有効と思われる教材・教具を選定し、効果的に活用する意義の認識 (□-3)	4 - 3 - 2 - 1	4 - 3 - 2 - 1
⑥	教科指導における情報教育についての理解 (□-4)	4 - 3 - 2 - 1	4 - 3 - 2 - 1
⑦	I C T機器を授業等の場で活用する意義の認識 (□-4)	4 - 3 - 2 - 1	4 - 3 - 2 - 1
⑧	授業のねらいや子供の反応などに留意しながら授業を行う意義の認識 (□-5)	4 - 3 - 2 - 1	4 - 3 - 2 - 1
⑨	授業評価の意義や方法についての理解 (□-7)	4 - 3 - 2 - 1	4 - 3 - 2 - 1
⑩	自他の授業について、学力の育成、子供たちへの関わり方等の観点で評価する意義の理解 (□-7)	4 - 3 - 2 - 1	4 - 3 - 2 - 1
⑪	教科等に応じた評価規準の設定の仕方への理解 (□-8)	4 - 3 - 2 - 1	4 - 3 - 2 - 1
⑫	評価規準に基づいて子供の学習の表れを捉え、評価する意義の理解 (□-8)	4 - 3 - 2 - 1	4 - 3 - 2 - 1

- ◎ 上の項目の中で、自分自身の評価が実践前と後とで変化した項目のうち、自分にとってとりわけ意味のある変化を1つ取り上げ、どのような機会がその変化につながったのか、なるべく具体的に書いてください。

## 【児童・生徒指導に関する項目】

	評価項目	(1) 実践前	(2) 実践後
①	子供たちの発達の段階と、その特徴についての理解 (□-1)	4 - 3 - 2 - 1	4 - 3 - 2 - 1
②	公平で受容的な態度で一人一人の子供に接し、相互理解を深める意義の認識 (□-2)	4 - 3 - 2 - 1	4 - 3 - 2 - 1
③	子供たちの問題行動の背景について多面的に捉える必要性の理解 (□-3)	4 - 3 - 2 - 1	4 - 3 - 2 - 1
④	問題行動を発見したらすぐに周囲の教師等に連絡・報告・相談し、適切な指導を行う必要性の認識 (□-3)	4 - 3 - 2 - 1	4 - 3 - 2 - 1
⑤	教育相談の重要性への理解 (□-4)	4 - 3 - 2 - 1	4 - 3 - 2 - 1
⑥	特別支援教育の意義や、子供たちの障害に応じた指導の在り方についての理解 (□-5)	4 - 3 - 2 - 1	4 - 3 - 2 - 1
⑦	特別な支援を必要とする子供に対し、専門家のアドバイスを受けながら個に応じた指導を行う必要性の理解 (□-5)	4 - 3 - 2 - 1	4 - 3 - 2 - 1
⑧	いじめ・差別・不登校や体罰など、子供たちの人権にかかわる諸問題への危機意識 (□-6)	4 - 3 - 2 - 1	4 - 3 - 2 - 1
⑨	校内組織や関係機関と連携して指導することの大切さの理解 (□-6)	4 - 3 - 2 - 1	4 - 3 - 2 - 1
⑩	キャリア教育の意義や、指導方法に関する知識についての理解 (□-7)	4 - 3 - 2 - 1	4 - 3 - 2 - 1
⑪	校外学習における安全指導の重要性や、アレルギー等を含む日常生活全般における安全確保のために必要な事項の理解 (□-8)	4 - 3 - 2 - 1	4 - 3 - 2 - 1
⑫	学級担任の役割や大まかな仕事内容についての理解 (□-9)	4 - 3 - 2 - 1	4 - 3 - 2 - 1
⑬	学級経営の大切さや、学級経営案作成の意義についての理解 (□-10)	4 - 3 - 2 - 1	4 - 3 - 2 - 1
⑭	子供たちとの間に信頼関係を築き、学級集団をまとめる努力をする意義の認識 (□-10)	4 - 3 - 2 - 1	4 - 3 - 2 - 1
⑮	教室掲示や座席配置の工夫など、子供たちが学びやすく過ごしやすい教室環境を整えることの大切さへの理解 (□-11)	4 - 3 - 2 - 1	4 - 3 - 2 - 1

- ◎ 上の項目の中で、自分自身の評価が実践前と後とで変化した項目のうち、自分にとってとりわけ意味のある変化を1つ取り上げ、どのような機会がその変化につながったのか、なるべく具体的に書いてください。

## 質問2

今回の実践への参加を通して、あなた自身の理解や学びがどの程度深まったかを自己評価し、4段階で回答してください。4段階の基準は、**質問1**と同じです。

なお、実践内容が評価になじまない質問については、「該当なし」に○をつけてください。

質 問		自 己 評 価	
教育課題に対する理解	①	今回の実践の根底にある現代的な教育課題を理解できましたか。	4 - 3 - 2 - 1 / 該当なし
	②	実践の準備や教材研究に、積極的に関わることができましたか。	4 - 3 - 2 - 1 / 該当なし
	③	実践（構想・教材研究を含む）に関わることで、教育課題についての理解が深まりましたか。	4 - 3 - 2 - 1 / 該当なし
	④	実践授業の参観や、（直接やり取りがあった場合には）現場の先生からの意見・アドバイス等によって、教育課題に対する理解が深まったり広がったりしましたか。	4 - 3 - 2 - 1 / 該当なし
児童・生徒理解	⑤	実践がねらいとする子供の課題を理解できましたか。	4 - 3 - 2 - 1 / 該当なし
	⑥	実践に関わることで、子供が抱える課題等についての理解が深まりましたか。	4 - 3 - 2 - 1 / 該当なし
	⑦	実践の構想や教材研究などの準備の際、子供が抱える課題を十分に意識できましたか。	4 - 3 - 2 - 1 / 該当なし
	⑧	実践から生まれた子供の学びについて、考察することはできましたか。	4 - 3 - 2 - 1 / 該当なし
	⑨	実践授業の参観や、（直接やり取りがあった場合には）現場の先生からの意見・アドバイス等によって、子供に対する理解が深まったり広がったりしましたか。	4 - 3 - 2 - 1 / 該当なし
学校現場に出る学ぶ意義	⑩	実践に参加することで、学習内容についての理解や教材観（教科教育の場合）などが深まりましたか。	4 - 3 - 2 - 1 / 該当なし
	⑪	実践に参加することで、新たな課題を見出すことはできましたか。	4 - 3 - 2 - 1 / 該当なし
研究意義の研修会	⑫	現場に出た後、研究会や研修会に積極的に参加していく意義を感じましたか。	4 - 3 - 2 - 1 / 該当なし

## 国語科学習指導案

単元名・教材名

## みんなに学校のすてきなところを紹介しよう

～プログラミングで「動く通信」を作ろう～

主教材：「動く通信」（自作教材）

補助教材：「クラブ活動リーフレット」を作ろう（光村図書出版4年下）、「プログラミン」（<http://www.mext.go.jp/programin/>）

授業者 白幡小学校 小水 亮子

第4学年1組 31名

## 1 指導事項と言語活動

## (1) 指導事項

- 関心のあることなどから書くことを決め、相手や目的に応じて、書く上で必要な事柄を調べること。  
（「書くこと」ア）
- 書こうとするものの中心を明確にし、目的や必要に応じて理由や事例を挙げて書くこと。（「書くこと」ウ）
- 文章の間違いを正したり、よりよい表現に書き直したりすること。（「書くこと」オ）
- 表現したり理解したりするために必要な語句を増し、また、語句には性質や役割の上で類別があることを理解すること。（「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」イ(ウ)）

## (2) 言語活動

- 収集した資料を効果的に使い、説明する文章などを書く言語活動（言語活動例ウ）

本言語活動の特徴を次のように捉える。

- ① 相手や目的を明確に設定し、相手に応じて説明する文章を詳しくしたり簡単にしたりする。
- ② 伝えたいことを相手に明確に伝えるために、図表、絵画、写真、具体物などの資料を活用して書く。
- ③ 伝えたいことと文章と資料と見出しを関係付けて書く。

まず、①に迫るために、大好きな学校の場所や学校の歴史を「動く 80 周年便り」で伝えることを目的とする。また、子どもの『動く 80 周年便り』をタブレットに入れて校内に置き、多くの人に見てもらいたい。」という思いをもとに、相手を学校外部の人と学校内部の人と明確に設定する。そこから、相手に応じて概要や事例の内容を詳しくして説明する文章を書けるようにする。次に②は、相手に何を伝えたいかを明確にした上で資料を収集できるようにする。その際は、図表、絵画、写真など、伝えたいことに合うものを幅広く選択できるようにする。最後に③では、伝えたいことが明確に伝わる文章になるように、文章、資料、見出しを関係付けて考えることができるようにする。

以上から、本言語活動で身に付けたい力を、伝えたいことを明確にして書く力、伝えたい相手や目的に応じて書き方や表現を変えて書く力、資料を効果的に使って書く力とする。また、学習を進める際には、視点を明確にして交流し、推敲する場面を意図的に位置付けていくようにする。その際の視点は、書いた文章を互いに読み合って、伝えたいことが明確に伝わる文章になっているか、相手に応じて書くことができているか、資料が効果的に使えているかなど、身に付けたい力とつなげて設定する。

## 2 単元目標

- 学校外部の人（来校者や地域の人）や学校内部の人（1年生から6年生や先生）に80周年を迎えた白幡小学校の素敵などころを伝えたいという思いを高めている。
- 相手や目的に応じて書こうとする中心を明確にしながらか学校について説明する文章を書いた上で、文章の間違いを正したり、よりよい表現に書き直したりしようとする。

## 3 子どもの実態と指導の手立て

### （1）子どもの学びの履歴

子どもたちは、これまでの書くことの学習で全校の子どもたちや地域に向けて学校の80周年記念イベントを紹介するために「80周年便り」を書く学習を行った。その学習では、イベントについて取材する際に、取材対象者、目的、取材方法を関係付けて、取材方法や取材で聞くことを具体的に考えることができた。また、「80周年便り」の記事を書く際には、紹介文の書き方を学び、紹介するために必要な要素（場所の案内やそれぞれの内容にあった事例など）を入れながら、書きたいことの中心を明確にして書くことができた。

しかし、「80周年便り」の記事や日常的に書いている文章から、伝えたいことを明確にして説明する文章を書いたり、資料を選択したりすることに戸惑っている実態がある。そこで、本単元を通して伝えたいことを明確にして書く力、相手や目的に応じて書き方や表現を工夫して書く力、効果的に資料を活用する力を身に付けて欲しい。

### （2）指導の手立て

- 主体的に学校について説明する文章を書いたり学習に取り組んだりできるようにするために

総合的な学習の時間と関連付け、これまでの学習の履歴を振り返ったり、地域の方や企業の方などと関わったりしながら学習を進めていく。

- ・ 単元の導入でこれまでの学びを確認し、相手や目的に応じて書いた経験の中でよかったことや課題になったことを明確にする。そこから、本単元で新たにできるようになりたいことを話し合い、自分たちで学習課題を設定し学習計画を立てられるようにする。
  - ・ 掲示物や学びの履歴から総合的な学習の時間で決めた目的を振り返り、学校について説明する文章を読んでもらう相手や、書く目的を明確に意識できるようにする。
  - ・ 子どもたちの目的に応じて学校外部の方やDeNAの方と関わる活動を位置付ける。自分とは違う立場の方や専門的な知識をもつ方との関わりを通して、書くことへの意欲を高められるようにする。
- 学校の素敵などころを多くの人に発信するために

DeNAの方の協力を得ながらプログラミングを活用し、タブレットで発信する。

- ・ 本単元における子どもたちの思いは、自分たちが作成したキャラクターを使って、学校を支えてくれる学校の場所・歴史・取組を「動く80周年便り」として発信することである。そこで、DeNAの方の協力を得ながらプログラミングを活用し、タブレットを用いて子どもたちが書いた学校について説明する文章を発信したい。タブレット上のコマンドを使うことで、相手のニーズに合わせた内容を表示することが可能になる。そのため、学級全員が書いた文章を一つのタブレットに入れても、読みたい内容を読み手自身が選択できる。また、学校外部の人と学校内部の人の文章の選択も可能になるため、相手に応じて書いたよさを活かすことができる。さらに、文章に合わせてキャラクターを動かしたり、資料を出したりすることもできるため、内容に合わせて効果的に資料やキャ

ラクターを活用して書くことができる。プログラミングを活用してタブレットで発信することで、子どもたちの思いや、本単元で取り上げている書く力を育てることにつながるようにする。

- ・ タブレットを利用することにより、タブレット上で間違いを正したり、よりよい表現に書き直したりすることができる。また、タブレット内に文章を履歴として残すことで、子どもたち自身が文章の変容を自覚できるようにする。

○ 相手や目的に応じて書き方や表現を変えて書く力や、適切な資料を選択する力を育てるために

学校外部の人から文章を読んでもらって感想をもらったり、考えを深められるようなワークシートを効果的に使用したりする。

- ・ 相手や目的に応じて、書き方や表現を変えて書く力を育てるために、学校外部の方に子どもたちが書いた文章を読んでもらって感想をもらう時間を位置付ける。具体的には内部の人に向けた文章では様子を簡単に書くようにしたり、外部の人に向けた文章では伝えたい場所の案内を詳しく書いたりすることが考えられる。
- ・ 子どもたちには学校外部の視点をもつことはできない。そのため、学校外部の方に書き方を評価してもらうことで、相手に応じたよりよい表現に直すための視点をもらって推敲できるようにする。
- ・ 相手に応じて書き方や表現を工夫して書くために、外部の人からもらった感想と自分の書いた文章を関係付けて書くことができるワークシートを用意する。また、内部と外部の文章を比較できるワークシートを使って、外部の人に伝える時には、概要を詳しく説明したり、具体的に書いたりする必要があることを捉えられるようにする。

○ 交流を通して、適切に書く力を育てるために

目的や意図を明確にした交流を取り入れることで、書く力を育てられるようにする。

- ・ 交流する際には、子どもたち自身が交流の目的や意図を理解した上で臨めるようにしたい。そのため、教師から一方的に促すのではなく、子どもたちと共に目的を確認したり、どのメンバーで交流するとよいかを考えたりしながら進めるようにする。
- ・ 役割を決めて、各自が責任をもって取り組めるようにする。また、話の内容を深めるための語彙、軌道修正のための語彙などを掲示し、学習環境を整えた上で交流できるようにする。
- ・ 交流の際に、子どもたちが話し合ったことや個々の考えの変容や深まりを教師が捉えられるようにしたい。そのため、グループ用のワークシートを用意したり、個々のワークシートに振り返りを書く欄を設けたりすることで、子どもたちの様子や身に付けた力を可視化できるようにする。

#### 4 単元の評価規準

国語への 関心・意欲・態度	書く能力	言語についての 知識・理解・技能
① 情報を読み手に分かりやすく伝えるため、図表、絵、写真などの視覚に訴える資料を活用しようとしている。	② 本や文章、図表、絵、写真、具体物など、収集した資料から説明の目的や文章の種類に応じて効果的なものを選んでいる。 ③ 視覚化したり具体化したりして説明するために、文章を図解したり写真やグラフを解説したりしながら、文章と図表などの資料とを関係付けて学校について説明する文章を書いている。 ④ 表記や文末表現の使い方などに注意して間違いを正したり、自分の考えを明確に記述しているか、表現の曖昧さはないかなどについて確かめたりしている。	⑤ 物の名前、動き、様子を表す語句など「性質」の上での語句の類別や、文の主語、述語、修飾する語句など「役割」の上での語句の類別があることを理解している。

## 5 部会テーマとのかかわり

＜市小学校国語教育研究会 研究主題＞

確かな言語能力を育成する国語科教育の創造

＜課題研究部 部会テーマ＞

豊かな言語活動の中で、実生活に生きる力をはぐくむ

～課題の発見と解決に向けた、主体的・協働的・課題解決的な学びをつくる交流のあり方～

課題研究部では、上記のテーマに迫るための具体的な研究内容を以下の3点としている。

### 1 学び手が解決したいと思う、必要感のある学習課題を設定する

子どもたちは、以前、白幡小学校の80周年記念イベントを伝えるための「80周年便り」を書く学習を行った。その学びを生かして本単元では、自分たちが作成したキャラクターを使って、学校の場所・歴史・学校の取組を学校内部の人と外部の人に向けて説明する文章を書く学習を行う。

本時では、学校外部の人に向けてよりよい表現に書き直すことを目指している。その際、子どもたちにとって必要感のある学習課題となるように、前時までに、以前から関わりのある大学生（学校外部の人）に文章を読んでもらって感想をもらい、個々が推敲の視点を明確にしている。その視点に沿ってグループで交流し、文章を仕上げるができるようにする。

子どもたちは外部の視点をもつことができない。そのため、読み手として想定している外部の相手から感想をもらう活動を位置付けることで、子どもたちの意欲を高め、解決する必要感のある学習になるように促していく。

### 2 交流を通して、確かな言語能力を身に付ける

本単元では、伝えたい相手や目的に応じて、書き方や表現を変えて書く力や目的や必要に応じて資料を効果的に使って書く力をより身に付けさせたい。そのためにグループでの交流を活用する。交流の際には、子どもたち一人一人が、本単元で身に付けたい言語能力の視点で困り感や迷い、課題意識をもった上で必要感のあるグループ交流ができるようにする。また、交流後の振り返りでは、どのような言語能力が身に付いたかということの評価し、次時や他の学習の活動でも生かすことができるようにする。

### 3 グループで思考操作を行いながら、より高次なものをつくり上げる

本時の前に、子どもたちは学校外部の人からもらった感想と自分が伝えたいことを関係付けて、相手に伝わるように文章を書き直している。その活動によって生まれた個々の課題や困り感をもとにグループ活動を行う。

グループ交流の際には、大学生からもらった感想と内部に向けて書いた文章を関係付けて考えられるようにする。そこから、個の考えがグループ交流を通して深まったり、高まったりすることをねらう。



## 6 総合的な学習の時間との関連

## 「80周年盛り上げ隊！」

## 1 80周年のイベントを知らせて盛り上げよう（総合18時間・国語11時間）

- 白幡の時間をどう作り上げるかという視点を共有し、学校探検をしてどんな学習材が適しているか話し合い、選定する。
- 80周年の創立記念式や記念音楽会など、周年行事（イベント）について調べる。
- イベントを盛り上げるために自分たちで何かできないかを考える。
- イベントを発信する計画を立て、どのようなメディアで発信するか考える。
- 80周年便りを書く計画を立てる。
- 80周年便りを1年生から6年生、先生に向けて発行する。

もっといろいろな方法で学校の特別な一年を盛り上げたいな。  
80周年便りももう一度書きたいな。

## 2 80周年キャラクターを作ってもっと盛り上げよう

（総合17時間・国語4時間・特活2時間）

- 地域やイベントを盛り上げる「ゆるキャラ」や「イベントキャラクター」について調べる。
- プロと関わり、キャラクターの作り方を取材する。
- 学校のキャラクターを作るために、白幡小の素敵なところを調べる。
- 学校のみんなにも、学校の素敵なおところを取材する。
- 学校の素敵なおところを整理・分析してキャラクターを作る。

学校の素敵なおところを取り入れたキャラクターを作ることができたね。  
作ったキャラクターを活用したいな。  
せっかく学校の素敵なおところが分かったから、多くの人に伝えたいな。

本時

## 3 白幡小のすてきなところを発信しよう

（総合10時間・11時間国語）

- キャラクターや資料をプログラミングで動かして80周年便りを作り、発信する方法を考える。
- プロと関わってプログラミングの組み方を知る。
- 動かし方や資料の提示の仕方を工夫して「動く！80周年便り」を作成する。

80周年を迎えたわたしたちの学校は、やっぱりとても素敵だね。  
今までよりも学校のことが大好きになったよ。

## 4 学校のすてきなところを振り返ろう（総合10時間）

- 活動から分かった人とのつながり（地域・学校のみんな・プロ）を振り返る。
- 学校の素敵なおところを具体的に振り返る。

7 指導と評価の計画（読むこと 11時間）

次	学習活動と内容	評価規準と指導の手立て（○）
1	<p>1 総合的な学習の時間での学びを生かし、「みんなに学校のすてきなところを紹介しよう～プログラミングで「動く80周年便り」を作ろう～」という課題を立てる。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>総合的な学習の流れを振り返り、80周年便りを書く目的を明確にすること</li> <li>子どもの思いを生かして学習課題を立てること</li> </ul>	<p>① 白幡小学校の場所・歴史・取組を、学校に来た人や学校にいる人にプログラミングを活用して「動く80周年便り」で伝えたいという思いを膨らませている。 【発言内容・振り返りの記述内容】</p> <p>○ これまでの学習の流れが確認できるように総合的な学習の時間に立てた学習計画を掲示しておく。</p>
<p>みんなに学校のすてきなところを紹介しよう ～プログラミングで「動く80周年便り」を作ろう～</p>		
2	<p>2 誰に向けて、どのような目的で「動く80周年便り」を作るかを明確にして学習計画を立てる。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>学校内部と学校外部の人に向けて書くということ</li> <li>学校の素敵などを伝えたいという思いをもつこと</li> <li>学校の素敵などの中から、具体的に伝えたいことを決めること</li> </ul> <p>3 伝えたいこと（場所・歴史・取組）と調べる方法を決め、取材する。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>自分たちの目的と関係付けながら伝えたいこと（場所・歴史・取組）を決めること</li> <li>情報に詳しい人に取材すること</li> <li>本や資料などを活用して調べること</li> <li>取材対象と関係付けて、立場や自分との関係を考えながら取材方法を選択すること</li> </ul> <p>4 取材したことや調べたことを整理し、不足している情報や、更に調べる必要がある情報を確認する。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>取材カードの内容を整理すること</li> <li>整理した内容を見直して、不足している情報がないか確認し、足りない情報については再取材すること</li> <li>伝えたいことと合う写真を撮ること</li> <li>子どもたちにとって必要な時に適宜再取材する機会を設けること</li> </ul>	<p>① 誰に何を伝えるかを考えて「動く80周年便り」を作る計画を立てている。 【発言内容・振り返りの記述内容】</p> <p>○ 目的を意識することができるように、掲示物を振り返る時間をとる。</p> <p>○ 総合的な学習の時間でもらったアンケートをもとに、学校の素敵などところはどんなところかを話し合い、伝えることを場所・歴史・取組にしぼる。</p> <p>○ 何を伝えたいかを決め、一人一つずつ自分の書く内容を決めるようにする。</p> <p>② 調べたいことに応じて、どのように取材するかを決め、取材対象や目的に応じて適切な取材方法を選択し、取材している。 【グループ活動の様子・ワークシートの記述内容】</p> <p>○ 調べることや取材対象に応じて取材方法を決めたり、取材の内容がまとめられたりするワークシートを用意する。</p> <p>○ 自分が伝えたいことについて詳しい教職員や地域の方、隣の学級の友達に取材する時間を確保する。</p> <p>○ これまでの学習を活かして相手に合った取材方法を選択して取材するようにする。</p> <p>② 取材してきた内容を整理し、同時に不足している情報に関して目的や取材対象に合わせて、再取材を行っている。 【ワークシートの記述内容・振り返りの記述】</p> <p>○ 取材で分かったことを付箋に書き、項目を付けて分類・整理する。</p> <p>○ 付箋に書いたことから、不足している情報や分からないことなどが無いかを見直す時間を確保する。</p> <p>○ 伝えたいことに合った写真を撮るために「アップとルーズで伝える」の学習を想起する。そのために掲示物を活用する。</p>

**5 取材したことから、相手や伝えたいことに応じて書く内容を決め、学校内部の人に向けて学校について説明する文章を書く。**

- ・ 伝えたいことを明確にし、効果的に資料を使いながら書くこと
- ・ アドバイスをし合いながら学校について説明する文章を書くこと
- ・ 学校について説明する文章をタブレットに打ち込むこと

**6 学校内部の人に向けて書いた文章を友達と読み合い、推敲の視点を明確にして文章を書き直す。**

- ・ 個々の課題を明確にして推敲すること
- ・ 相手に応じて書く、資料を効果的に使う、表現を工夫するなど、視点を明確にして推敲すること
- ・ グループで読み合い、間違いを指摘したりよりよい表現に直したりすること
- ・ 伝えたいことが明確に伝わる文章になっているか確認すること

**7・8 大学生（学校外部の人）に学校内部に向けた文章を読んでもらって感想をもらい、感想を参考にしながら学校外部の人に向けた文章を書く。**

- ・ 伝えたいことを明確にし、相手に応じた書き方や表現で書くこと
- ・ アドバイスをし合いながら学校について説明する文章を書くこと

○学習活動4は、取材活動や記述の活動の中で分からないことや詳しく知りたいことがある時に、繰り返し行うようにする。

③ 伝えたいことに合う写真や図表を用いて、文章と資料とを関係付けて学校について説明する文章を書いている。

⑤ 物の名前、動き、様子を表す語句など「性質」の上での語句の類別や、文の主語、述語、修飾する語句など「役割」の上での語句の類別があることを理解している。

【ワークシートの記述内容・振り返りの記述】

○ 伝えたいことの内容を明確に意識して書くことで、コマンドの作成や、プログラミングに活かせるようにする。

○ グループ活動の際は、自分が伝えたいこと（場所・歴史・取組）が同じメンバーで組み、お互いにアドバイスをし合いながら書くことができるようにする。

○ グループ活動を取り入れ、伝えたいことが明確か、資料を効果的に使っているかという視点で確認しながら書くことができるようにする。

○ 学校を説明するための文章は、一人300～400文字で書き、シートは学校外部・内部それぞれ5～6枚で仕上げるようにする。

④ 学校内部の人に向けた文章を、伝えたいことが明確になっているか、相手に応じた書き方になっているか、絵や図などの資料を効果的に使っているかという視点で読み直し、よりよい表現に直している。

【学校について説明した文章・グループ活動の様子】

○ 伝えたいことが明確になっているか、相手に応じた書き方になっているか、絵や図などの資料が効果的に使っているかという三つを推敲の視点にする。

○ グループ活動では、自分が伝えたいこと（場所・歴史・取組）が同じメンバーで組み、視点を明確にしながら推敲して書き直すことができるようにする。

○ 個々がタブレットを操作し、その場で直せるようにする。

③ 伝えたいことを明確にして、相手に応じた書き方や表現を考えながら書いている。

⑤ 物の名前、動き、様子を表す語句など「性質」の上での語句の類別や、文の主語、述語、修飾する語句など「役割」の上での語句の類別があることを理解している。【ワークシートの記述内容】

○ 個々がタブレットを操作し、文章を打ち込

<p>3</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>学校について説明する文章をタブレットに打ち込むこと</li> <li>自分が伝えたいことと大学生からもらった感想をもとに文章を書くこと</li> <li>自分なりの課題や、書いた時に大切にしたいことを明確にすること</li> <li>学校内の人と、外部の人との文章の書き方の違いを比較しながら書き直すこと</li> </ul> <p>9 (本時)</p> <p>学校外部の人に向けた書いた学校について説明する文章をグループで読み合い、間違いを正したり、よりよい表現に直したりする。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>大学生にももらった感想や自分の思いから、個々の推敲のポイントを明確にして交流すること</li> <li>学校外部の人からもらった推敲の視点を確認しながら推敲すること</li> <li>グループで読み合い、間違いを指摘したりよりよい表現に直したりすること</li> </ul> <p>10 タブレットを操作し、グループ全体の文章を見通して、よりよい表現に直したり、効果的に資料を使ったりできるようにする。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>タブレットを操作し、相手の立場になって読みやすさや使いやすさを確認すること</li> <li>グループ全体の文章を見通して確認し、よりよい発信の仕方になるようにすること</li> </ul> <p>11 校内にタブレットを置き、使った感想を聞いて、書いて発信することのよさや、身に付けた力について振り返る。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>伝えたいことがきちんと伝わっているか振り返ること</li> <li>相手が聞いたことと、返ってきた答えが合っていたか振り返ること</li> </ul>	<p>んでいくようにする。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>学校を説明するための文章は、一人 300～400 文字で書き、シートは学校外部・内部それぞれ 5～6 枚で仕上げるようにする。</li> <li>大学生からもらった感想だけをもとに書くのではなく、自分の書きたいことや伝えたい思いも大切にするように声をかける。</li> </ul> <p>④ 伝えたいことが明確か、相手に応じた書き方になっているかという視点で読み直し、よりよい表現に直している。 【学校について説明した文章・グループ活動の様子】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>大学生からもらった視点を確認しながら推敲できるように、前時のワークシートを手元に置いたり、振り返りを教室に掲示したりしておく。</li> <li>グループ活動では、自分が伝える内容(場所・歴史・取組)が同じメンバーで組み、視点を明確にしながら推敲して書き直すことができるようにする。</li> <li>一人ひとりがタブレットを持ち、学校内部の人に向けた文章と比較しながら交流できるようにする。</li> </ul> <p>④ タブレットを操作して、グループ全体の文章を見直し、構成を見直したり、よりよい表現に直したりしている。 【学校について説明した文章・グループ活動の様子】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>グループ活動を取り入れ、グループ全体の文章を見通して、よりよい表現に直したり、効果的に資料を使ったりできるようにする。</li> <li>確認する視点は、個々の書いた文章の表現の確認、効果的な資料の使い方などで行うようにする。</li> </ul> <p>④ 「動く 80 周年便り」を読んだ人からの感想をもとに、伝えたいことが伝わるか、効果的に資料を使っているか、相手に応じた表現になっているかという点から振り返り、よりよい表現に直している。 【80 周年便り・振り返りの記述】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>読んでくれた人からの感想を文章の振り返りの視点として活用できるようにする。</li> <li>タブレットをたくさんの人に使ってもらいたいという子どもたちの思いを大切に、子どもたち自身の必要感に沿ってグループ活動を行うようにする。</li> </ul>
----------	--	--

## 8 本時目標

大学生からの感想と関係付けながら友達の文章を推敲する活動を通して、概要や事例を詳しくしたり簡単にしたりする必要があることに気づき、その視点をもとに文章を書き直そうとしている。

## 9 本時展開 (9/11)

学習活動と内容	評価規準と指導の手立て (○)
<p>1 本時の学習課題を確認し学習の見通しをもつ。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>学習の見通しをもつこと</li> </ul>	<p>○ 前時の学習の流れを掲示しておくことで、学習を思い出すことができるようにする。</p>
<p>大学生からもらった感想と友達の文章を関係付けながら読み、白幡小のことを知らない人に伝わる文章になっているかグループで確認して、よりよい文章に書き直そう</p>	
<p>2 同じ伝えたいこと(場所・歴史・取組)を選んでいるグループで文章を読み合い、推敲する。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>自分が推敲のポイントにしたところを友達に伝えながら、個々に課題意識をもって交流すること</li> <li>書いた文章の中で困っていることや、友達に聞きたいことを明確にして伝えること</li> <li>大学生からもらった感想を根拠にしながら話し合うこと</li> </ul>	<p>○ 課題意識をもって交流に参加することができるように、交流の中で友達に聞きたいことや解決したいことを明確にしておく。</p> <p>○ 相手に応じて詳しくしたり簡単にしたりして説明する文章が書けているかななどの視点で推敲できるように促す。</p>
<p>予想される交流の様子</p> <p>○グリーン広場の様子や、学校のどこにあるかを知らないから、詳しく書いたり地図を載せたりするといんじゃないかな。</p> <p>○人の言葉を書く時は、その人が学校とどのようなつながりがあるか書く必要があると思う。</p> <p>○「伝えたいこと」の笑顔があふれている様子を詳しく書いた方がいいと思うよ。</p>	<p>④ 学校のことを知らない相手を意識し、場所・歴史・取組、人物の概要や事例が詳しく書かれているかという視点で友達の文章を読み直して、相手に応じた書き方に直して書いている。</p> <p>【学校について説明した文章・グループ活動の様子】</p>
<p>3 書き直した部分を全体で発表し、学校を知らない人に対してどのように書けばよいかまとめる。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>場所の様子や位置を詳しく書く必要があること</li> <li>伝える事物のよさを具体的に表すこと</li> <li>呼びかけを相手に応じて変えること</li> <li>誰でもわかる一般的な書き方で書くこと</li> </ul>	<p>○ 一人一台タブレットを持ち、それぞれが書いた文章を見合いながら交流できるようにする。あらかじめ座席表に個の考えとそれぞれのグループへの指導を整理しておき、短い時間で各グループに指導したり、評価をしたりすることができるようにする。</p>
<p>4 交流したことをもとに、学校外部の人に向けた文章を書き直す。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>タブレットを見直して、自分の書いた文章の変容を確認すること</li> </ul>	<p>○ 交流が進まないグループには、教師が進めた方や課題になることを助言して、活発に活動することを促す。</p> <p>○ 学習活動2と学習活動3を繰り返しながら推敲できるようにする。友達の意見と似たところについてはその場で提示し、一緒に考えられるようにする。</p>
<p>5 本時の振り返りをする。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>学校のことを知らない人には、場所・歴史・取組みの概要を詳しく説明する必要があること</li> <li>内容によっては、自分の考えや思いだけを書くのではなく、一般化して書く必要があること</li> </ul>	<p>○ 振り返りでは、本時の活動を生かして相手に応じた書き方をまとめられるようにする。</p>

【学習課題】 大学生からもらった感想と友達の記事を関係付けながら読み、白幡小のことを知らない人に伝える文章になっているかグループで確認して、よりよい文章に書き直そう

**伝えたいこと：「スマイル広場」は学校に笑顔があふれてほしいという思いによって作られたこと。**

**元の文章**

これは、西棟の一階にある「スマイル広場」の写真です。

写真

**直した文章**

これは、西棟の一階にある「スマイル広場」の写真です。

写真



※ 当日はタブレットとワークシートの両方を使います。

スマイル広場に、みなさん一度は行ったことがありますよね。色とりどりの花や木。真っ白なタイルの床。北風の寒さから守ってくれる緑の壁。また、学校の中でも、とても日当たりがよくあたたかい場所です。スマイル広場には、いつも笑顔があふれています。

写真

スマイル広場には、色とりどりの花や木がたくさん植えられています。周りは緑色の高い壁にかまれています。床は白いタイルで、写真のように階段になっています。スマイル広場は、学校の中でもとても日当たりがよい場所です。そのため、あたたかい日差しを浴びながら、階段に座ってくつろいだり、遊んだりする子どもも多く、いつも笑顔にあふれています。

写真

.....、.....

.....

.....

.....

写真

.....、.....

.....

.....

.....

写真

**話し合いたいポイント**

知らない人は、どのよう  
に笑顔があふれているか  
わからないので様子をく  
わしく書いた。

スマイル広場を知らない  
ので、場所についてくわ  
しく書いた。

大学生からもらった付せんを参考に、自分が困っていることや確認してほしいことをグループで話し合いたいポイントとしてはっきりさせておこう。

